

# 肝胆膵の語源

〈長崎市・田上病院顧問〉 土屋 涼 一

長 崎 県 医 師 会 報 別 冊

平成11年4月・第639号

# 肝胆膵の語源

〈長崎市・田上病院顧問〉 土屋 涼 一

一昨年の本誌（長崎県医師会報平成9年7月第618号p37～42）に同じタイトルの小論文を発表したが、ほとんど漢字の肝胆についてのみ言及した。そこで今回は印欧語族を中心とした肝について述べ、さらに若干の肝に纏わる事柄を述べることにする。

## 1) 印欧語族における肝

高津春繁(1)によると、印欧語族とは東は中央アジアより西はヨーロッパの西端に至るまで、また現在ではアメリカ大陸及び濠州にまで広がっている一大言語族に与えられた名称である。印欧語族の祖語については風間喜代三(2)は、諸説あるが紀元前2千5百年をめどに、具体的に考えて、その故郷を求めるならば、南東ヨーロッパ（黒海からカスピ海の北にひろがる水と草原に恵まれた地域）説が最も有力であると考えられるとしている。なおアラビア語（アラブ諸国の言葉）、ヘブライ語（イスラエルの国語）や古代エジプト語な

どは北アフリカ・西アジア語族に属し印欧語族ではない(3)。

肝は英語で liver、ドイツ語で leber といよいよ似ているが、しかしフランス語では foie、イタリア語では fegato である。さらにギリシア語では hepar、ラテン語では iecur である。ついでにサンスクリット語で yakrt、アラビア語では kabid、エジプト語で amst という。全くまちまちに表現されている。偶々 The Oxford Dictionary of English Etymology という辞書(4)を見たところ、There is no common Indo-European name for the liver. と書いてあった。幸いにして印欧語族の同義語の辞書(5)を手に入れることができた。それによると表1のごとく共通の言葉というものはないが、同系と思われるものを集めていくつかのグループに分けることができる。

表1 印欧語における肝

ギリシア	hepar	古アイスランド	lifr	リトアニア	kepenys, jaknos (pl)
新ギリシア	sykoti	デンマーク	lever	レット	aknas (pl)
ラテン	iecur	スウェーデン	lever	教会スラブ	jetro
イタリア	fegato	古英語	lifer	セ・クロ*	jetra
フランス	foie	中英語	liver	ボヘミア	jatra
スペイン	higado	新英語	liver	ポーランド	watroba
ルーマニア	ficato	オランダ	lever	ロシア	pecenka, pecen
アイルランド	oa	古高地ドイツ	libara	サンスク*	yakrt
新アイルランド	oe	中高地ドイツ	leber (e)	アヴェスタ	yakara
ウエールズ	afu	新高地ドイツ	leber		
ブリタニー	afu				

セ・クロ\*:セプロ・クロアチア、 サンスク\*:サンスクリット

ギリシア語の hepar は  $\gamma\pi\alpha\rho$  であるが、 $\gamma$  は氣息音で、発音すると he となるのである。その属格は hepatos で、ラテン語 iecur の属格は iecoris、リトアニア語が jaknos、古リトアニア jekanas、サンスクリット語が yakrt で、似ているという感じは拭いきれない。レット語が aknas で、サンスクリット語 yakrt の属格が yaknas、アベスタ語 yakara で同様に似ているとおもわれる。

新ギリシア語の sykoti は、sykoton の縮小形で、sykoton は sykon `fig` から来た sykotos の中性形である。hepar sykoton とは乾燥した figs で飼育された動物の肝を表現した。fig のラテン語は ficus、sykoton に相当するラテン語が ficatum で、これからイタリアの fegato、フランス foie、スペイン higado、ルーマニアの ficat が生まれた。

アイルランド語 oa、新アイルランド語 ae、ウエールズ afu、ブリタニー avu でケルト人に共通の語源があると思われる。

古アイスランド語は lifr、古英語は lifer でゲルマン語として共通のものがある。恐らくギリシア語の lipos=fat、liparos=fatty からきており最初に食品としての肝に名づけられたのであろう。

ロシア語の pecenka や pecen は `焼く` を意味する pec からきている。同様にリトアニア語の kepenis は `焼く` の意味の kepti からのもので共に “cooked liver” からきたものである。

教会スラブ語が jetro、セプロ・クロアチア語 jetra、ボヘミア語 jatra というが、互いに似ている。教会スラブの `子宮` を意味する atroba とポーランド語の watroba が近いと思われるという。

## 2) シュメールと肝

人類は何時頃から文字を使うようになったのであろうか。

文字とともに、文字による人類の歴史もは

じまるがそれは、メソポタミアにおいて、すでに都市国家時代にはいった、前三千年の頃であった(文献6)。また貝塚茂樹(7)によると、古代文明の中ではシュメールがまず文字を発明し、ついでエジプト、インダス文明が文字を使用した。文字をもって言語をあらわすという着想が、シュメールから他の文明国に伝播し、それぞれの国の文字の成立をうながしたのではないかといわれる(文献7、p.72)。また貝塚は永河時代のオリエントの気候は、歴史時代や今日とはまったくちがっていたという。今日は大西洋からヨーロッパを西から東にふきぬける暴風が、その頃は、ヨーロッパ上空の寒冷な空気によって南に圧迫され、北アフリカから西アジアを通過していた。したがって後に砂漠やステップになったところに、草木がおいしげっていた。およそ前一万年から前六千年までの中石器時代に気候が変わり、肥沃な土地が砂漠やステップになり、人々は沼地で人の住めなかった大きな川の流域に下がってきて野生の小麦や裸麦を採集したり、家畜を飼いはじめ、定住生活に移行し、やがて農耕がはじまった。およそ前六千年ないし四千年の新石器時代には、村ができ、つづいて町も生まれた。パレスチナのジェリコで発掘された町は世界で最古のものである。この年代は、放射性炭素試験の結果、前五千年ごろのものであることがわかった。

飯島 紀(8)によると、チグリス、ユーフラテス両河に肥沃な土地が出現すると、人々の定着が始まったが、この人達はシュメール人ではなかった。シュメール人は紀元前3500年頃からこの地方に侵入し、キシエで第一王朝を作り上げたという。彼等の言葉はセム語族や印欧語族ではなく、アルタイ諸語系の特徴を多く持っており、ことによるとシュメール人はモンゴロイドの親戚かもしれないとおもわれるとしている。

ウル・ナンムはウルを都として、五代110年に及ぶウル第三王朝(前約2065~1955)を

樹立した。(文献7 p. 348)

この頃からセム族の文化は深くシュメールに浸透していた。シュメール語と並んでアカド語が第二国語となり、将来を占うのに羊の肝臓を用いるなど、宮廷で公然と行われるようになったという。飯島はこの文献で肝臓の占いについて述べていないが、シュメール語の肝臓を記載している。初期の肝の絵文字は菱形で古典的楔形文字、ついで後期楔形文字と文字に変遷はあるが hur と読む (p. 38)。しかし p. 267では同じ絵文字と発音で「描く」の意味となり、p. 305では肝臓のほか「印」、「足枷」、さらに「引っ掻く」の意味が示されている。なお p. 324には肝占いをするために小羊を使用したためであろう、sila kingia という言葉を紹介している。sila は小羊、kingia は「前触れ」または「使者」で肝占いのための小羊の意味である。

杉 勇(9)によれば、ペルシャの古都ペルセポリスの遺跡の各所に「ペルシャ語でもなく、アラビア語でもアルメニア語でもユダヤの語でもなく、何人にも読めない碑文」がぎざまれているのを最初に認めた人は、スペインのペルシア使節であったアントニオ・デ・グヴェアで1602年のことであった。またイタリアの旅行家ヴィアッギ・ディ・ピエトロ・デラ・ヴァッレが1621年10月21日の手紙にペルセポリスの岩壁に刻み込まれたしるしの五つを写しとったが、ヨーロッパ人の手で写し取られた楔形文字の最初の記念すべき文字となった。その後楔形文字に対する関心が異常にたかまったが、このような状況の最中に登場して、楔形文字解読のための根本原理をはじめと成した人が、日本研究で有名なドイツ人エンゲルバート・ケンペルであった。かれはドイツ生まれでそこで学問を身につけたが、大部分をオランダで過ごした国際人であった。かれは1690年(元禄三年)来日し日本滞在中に西欧にとって未知の植物を始め、風俗・習慣や歴史を研究して、日本の国情をひ

ろく正しくヨーロッパ人に紹介した。かれはシナについても深い関心を持ち、またペルシアについての研究も異常な熱意をもっていった。かれは古代ペルシア語で書かれた三行の短い碑文と、バビロニア語で書かれた長文二十四行の碑文を写し発表した。その功績は大きい。そして「楔形文字」という語を用いた最初のひとであるという。

さて前回の論文で漢字の出来方の法則である六書(りくしょ)を紹介したが、杉が楔形文字もエジプト古代文字もその出来方は、まったく漢字と一致するとしているのは興味深い。また現在、年代のわかっている最古の文書は古都ウルク第四b期層出土の約六百八十通の古文書で紀元前3100年ころのものとされているとのことである。

大英博物館の West Asian Antiques(西アジア古代美術)、メソポタミアの部に、高さ14.5センチメートルの羊の肝の粘土模型がある。恐らく肝占いを生徒に教えるためのもので、表面は多数の区画で区切られているが、各々の区画には、夫々の部分にあらわれる“しるし”の意味について、楔形文字で説明が刻まれている。バビロンの北方のシッパールにて出土、紀元前1700年頃のものと思われる。

肝占いについて述べられた文献を直接読んだわけではないが、Chenら(10)が比較的詳しく記載しているので紹介する。肝占い(hepatoscopy)とは予言的な“しるし”を得るため、羊を犠牲にしてその肝をみることで、バビロニアの人たちの間で高度の発展をとげたものであった。国家的並びに私的でも重要な出来事が占われた。旧約聖書のエゼキエル書第21章21節に「バビロンの王は道の分かれ目、二つの道のはじめに立って占いをし、矢をふり、テラピムに問い、肝を見る。」と肝占いが記載されており、やがてそれはヘブライ人のみならずエトルリア人ついでギリシアやローマ人に広がった。

## 文 献

- 1) 高津春繁：比較言語学入門、岩波文庫 岩波書店 東京 1992 p. 40
- 2) 風間喜代三：印欧語の故郷を探る、岩波新書 岩波書店 東京 1993 pp. 188~190
- 3) 祖父江孝男：文化人類学入門、中公新書 中央公論社 東京 1994 p. 103~107
- 4) Onions CT, Friedrichsen GWS and Burchfield RW: The Oxford Dictionary of English Etymology, Oxford At The Clarendon Press 1966, p532
- 5) Carl Darling Buck: A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages, A Contribution to the History of Ideas. The University of Chicago Press, Chicago & London 1949, pp. 251~252
- 6) 今西錦司、池田次郎、河合雅雄、伊谷純一郎：世界の歴史1 人類の誕生、河出文庫、河出書房新社、東京 1989 p. 432
- 7) 貝塚茂樹：世界の歴史1 古代文明の発見、中公文庫、中央公論社 東京 1974 p. 72, p p. 332~334
- 8) 飯島 紀：シュメール人の言語・文化・生活、泰流社 東京 1996 p. 14, 18, 25, 38, 130, 267, 305, 324
- 9) 杉 勇：楔形文字入門、中公新書、中央公論社、東京1968 pp. 6~14, 82~83, 106~110, 129
- 10) Chen T.S. & Chen P.S.: Understanding The Liver A History, Greenwood Press, London 1984 pp. 3~10